

看護大学生の口腔保健行動の認識・関心と臨地実習での体験:

2024 年度 4 年次学生の実態分析

桑村由美¹⁾ 澄川真珠子²⁾ 上村浩一³⁾ 青山美智代⁴⁾

1) 徳島大学大学院医歯薬学研究部 2) 札幌医科大学保健医療学部

3) 兵庫県立大学看護学部 4) 四條畷学園大学看護学部

1. はじめに

偉大な看護研究者であり看護理論家であるヘンダーソンが「看護の基本となるもの」において「患者の口腔内の状態は看護ケアの質を最もよく表すもののひとつである」¹⁾と述べているように、口腔内へのケアは看護師が行う大事な看護技術として位置づけられている。しかし、コロナ禍以降、感染の危険から、学生相互の技術演習ができないなど看護学士課程での口腔ケア教育の難しさが報告されている²⁾。

A 大学では、大学で看護学を学ぶ学生(以下、看護大学生)を対象に、口腔保健行動についての認識・関心等と臨地実習での体験についての調査を2016年から毎年、実施している。

本研究の目的は、2024年度の4年次看護大学生の口腔保健行動と口腔ケアへの知識・関心、臨地実習での体験の実態を前年度(2023年度)およびコロナ禍前(2019年度)の同調査結果と比較し、今後の教育への示唆を得ることである。

2. 方法

1) 調査対象者

4年制大学看護師養成課程に在学中で2024年度の看護統合実習を履修した4年次学生である。

2) 調査方法

看護統合実習の終了時の2024年7月に、自記式無記名の質問紙調査を実施した。

3) 調査項目

学生の「口腔保健行動や口腔内の状態(15項目)」は2件法(はい・いいえ)、「口腔ケアの知識(12項目)」と「口腔や口腔ケアへの関心(16項目)」は4件法(とてもある・少しある・あまりない・全くない)/(とてもよく知っている・少し知っている・あ

まり知らない・全く知らない)で回答を得た。「大学4年間の臨地実習での口腔ケアに関する体験(18項目)」は3件法(指導の下で実施・見学・見学も実施もなし)で、口腔ケアへの自己の取組の状況については4件法(積極的、やや積極的、やや消極的、消極的)で評価し、やや消極的・消極的と評価した場合にはその理由を4件法(とてもあてはまる/ややあてはまる/あまりあてはまらない/全くあてはまらない)で回答を得た。臨地実習での学びや感想は自由記述で回答を得た。

4) 分析方法

2024年度と前年度(2023年度)およびコロナ禍以前(2019年度)等、2群間の割合の比較はFisherの正確確率検定を用いた。統計解析は、IBM SPSS Statistics 25.0J for Windowsを使用し、有意水準は5%とした。自由記述は意味内容ごとに整理した。

5) 倫理的配慮

研究参加は自由意思とし、参加の有無が成績等には関係しないこと等を口頭と文書で研究協力者に説明した。本研究は所属施設の研究倫理審査委員会の承認を得て実施した(承認番号 2329-9)。

3. 結果

2024年度は59名の協力が得られた(回収率78%)。口腔保健行動では自分の口腔内の観察42名(71%)で、2023年度(52名 [87%])と比べると有意に少なかった($p=0.045$)が2019年度(49名 [80%])とは有意な差はなかった。歯1本ずつの歯磨き49名(83%)、歯と歯肉の境目の歯磨き57名(97%)、歯科用フロスの使用16名(27%)、歯科健診の受診25名(42%)、矯正歯科治療中/経験有21名(36%)、歯みがき指導を受けた経験有34名

(58%)で、2019年度および2023年度との有意な差はなかった。口腔内の状態は、歯みがき時の出血18名(31%)、口腔内の痛み4名(7%)で2019年度および2023年度との有意な差はなかった。

歯の健康への興味は、とてもある14名(24%)、少しある34名(52%)で2019年度および2023年度との有意な差はなかった。

口腔ケアの知識で、知らない(全く知らない・あまり知らない)と答えた割合が高かった項目は、義歯の保管は水を張った容器で行う、口腔内の観察時にはペンライトなどを用いて明るく照らすであった。口腔ケアは誤嚥性肺炎の予防に繋がる、口腔ケアは全身状態の改善に繋がる等のその他の項目は知っていると答えた割合が高く、2019年度および2023年度との有意な差はなかった。

臨地実習での口腔ケア体験で、歯みがきは指導の下で実施7%・見学44%・実施も見学もなし49%で、2019年度と比べると指導の下での実施の割合が少なかった ($p<0.001$)(図)。義歯の清掃は2%・29%・69%、舌ケアは3%・36%・61%で、2019年度と比べると指導の下での実施の割合が少なかった ($p=0.001$, $p<0.001$)。口腔内の観察は22%・39%・39%で、2019年度と比べると指導の下での実施の割合が少ない($p=0.014$)が、2023年度と比べると見学の割合が多かった ($p=0.009$)。口腔内保湿は5%・39%・56%で、2023年度と比べると見学の割合が多かった ($p<0.001$)。なお、その他の項目は2023年度、2019年度の間で有意な差はなかった。

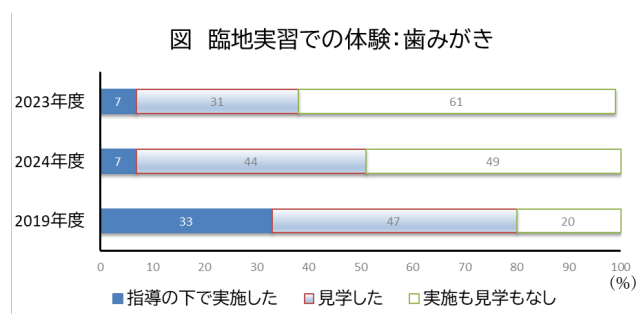
口腔ケアへの取組みの自己評価は、積極的5%、やや積極的44%、やや消極的36%、消極的15%で、2023年度および2019年度との有意な差はなかった。消極的・やや消極的と評価した理由は、多い順から実習時間に口腔ケアがなかった84%、他に優先するケアがあった81%、口腔ケアを行う必要がなかった81%、口腔ケアの技術が不足していた81%であった(複数選択可)。

自由記述は「保健師課程の実習で口腔の健康教育を行い、看護統合実習でその評価を行えた」「感染予防や生活の質の向上のために口腔ケアが大

切だと思った」などがあつた。

4. 考察

2024年度4年次学生は3年次の領域別実習時に新型コロナウイルス感染症が5類感染症に移行したため、実習での制限の大幅な緩和があつた学年である。学生自身の口腔保健行動や関心・知識などは2023年度、2019年度と大きな差はなく、コロナ禍の影響は少なかったことが推測される。臨地実習での体験は2019年度と比べ、指導の下での実施の割合は少ないが、2023年度と比べると見学の割合が増加しており、制限緩和の影響が考えられる。臨地実習では、生命に直結する問題解決が優先され、2019年度の口腔ケア体験も多くなかった。しかし、臨地場面で看護師は、化学・放射線療法中、人工呼吸器装着中、在宅療養中の方などの高度な口腔ケアに携わっている。学生が対象者の日常生活支援の中での口腔への看護の意義や技術の実際を具体的な場面を捉えて学べる支援が必要と考える。また、知らないと答えた割合が高かった口腔内の観察方法は自分の口腔内の観察時にペンライトを用いて体感するなどの学習支援により、理解しやすくなると考える。学生が口腔の重要性を看護の視点で理解でき、看護援助の実施に必要な技術習得ができるために、看護教育の中で、習得すべき口腔に関連する技術項目や到達度の検討も今後、必要となると考える。



引用文献

- 1) ヴァージニア・ヘンダーソン著 湯楨ます・小玉香津子訳:看護の基本となるもの, p.14, 新装版, 日本看護協会出版会, 2014年
- 2) Haresaku S, et al., Current status and future prospects for oral care education in Bachelor of Nursing curriculums: A Japanese cross-sectional study. Jpn J Nurs Sci. Apr;20(2):e12521, 2023